

OCUAC

大阪市立大学山岳会会報

NO.41

2006. 1. 15

マイナス15度の世界は想像を絶するものだった。冷気が体にしみ込んでいく。鼻水が凍る。足先や手の指先が痛む。あまりの寒さで息がうまくできない。こうして僕の体力は瞬く間に奪われてしまった。2時間ぐらい経って、空が少しずつ白み出す頃、自分の体力が尽きたことを悟った。

「もう無理です」と言おうとした。でも言えなかった。夜明けの光に照らされながら、ネパールへの出発の直前に亡くなった故人のことを思い出した。僕にアウトドアの楽しさを教えてくれた人だった。彼の遺品を遺族に頼まれて持ってきている。覚悟を決めた。とにかく頂上までは行こう。あとは、ままだ。 (本文「メラピークの頂を目指して」関智弘より)



メラ・ピーク への道

2005/9/30-10/30

ネパール、クーンブ 地域

佐々木 惣四郎

関 智弘 (法科4回生)

< 趣旨 > 山岳会として中国四光峰に遠征登山をして以来16年間、海外遠征らしきものはしていなかったが、久方ぶりに山岳部員が入り、かつ現役の関君がヒマラヤ登山に興味を有してくれたので、彼にヒマラヤ登山を経験させ、一段高みに導き、今後の部活動の活性化につなぐべく、今回の企画となった。

登山対象はメラピーク 6473M にてクンブ山群の南端にあるヒンクー谷の源流、メラヒマールの主峰。この登山後、カラパタール及びエベレストベースキャンプへのトレッキングを行いクンブ地域の概略の理解と高度の体験をする。

<ハイキャンプ目指して>

9月30日2800mのルクラについてシェルパ、コック、ポーター等11名と共にキャラヴァン開始し、チュタンガ(3100M)に設営。2日目でチェット、ラ4500mの峠を超えて4100mのチュリ、リに設営。4日目、4150mのタングナにいたり、翌日裏山へ600mの高度順化をする。6日目カーレ4750mに至るが、絶えず霧で夜は雨と雪で写真は撮れず。

7日目メラ、ラBC、5150Mに入り、翌日高度順化でハイキャンプ5600mに関君と共に登る。翌日9日目ハイキャンプに入り、夕方素晴らしい眺望に出会う。マカルーが圧巻で、ローツエ、ヌプツエ、エヴェレストが望め、さらに東方にカンチェジュンガが見える素晴らしいハイキャンプである。今回夕方ほとんど雨が雪で景色がかわらず、始めての大パノラマに

感動。

なお、驚いた事にハイキャンプまでキッチンテント、ポーター等8名が入り、ビックリ。また、先行パーティ3-4隊は全て下り、我々のみの設営であった。

<ピーク目指して>

10日目の10月9日、朝1時半起床、快晴に恵まれ、3時出発で約マイナス15度ぐらいで、約20CMの新雪でトレースの全くない中、軽くラッセルしながら順調に稼ぐ。6時前ぐらいにマカルー方面より真赤な圧倒的で、全く得もいわれぬ朝日に照らされる。気温はマイナス10度ぐらいに上昇。

しかし手袋、オーバー手袋にもかかわらず手先が凍りつき動かなくなる。シェルパが、カイロを用意してくれ、人心地つき登はんを続けた。最後を歩く関君が遅れ出し、鼻水が凍って6-7cmとなっている。

あとで解った事であるが、関君は、準備の服装に問題があり、冷気の為、体力を大幅のダウンさせ、撤退が頭に浮かびながら、これまでの山登りでの執念、友人、家族、山仲間を思い浮かべ8時45分シェルパのサポートを得て佐々木と共に登頂。

最後の登りは20mのザラメ化した壁でユマールとピッケルのピックでのトハン。頂上より景色は、マカルー、エベレスト、ヌプツエ、ローツエ、アマダブラム等、素晴らしく得難いものであった。

頂上での関君は、全身をブルブルと震わせながらも山仲間部員の寄せ書きの撮影、友人の遺品撮影をこなすが、立っているのが精一杯で、帰りには体力が持たない有り様。テッキリかといで降りようと思った。しかし、20mのエイト環による懸垂下降をして、自力で10時30分アタックキャンプ5600mに帰着。約6時間のトハンであった。

その後、彼の話聞いても到底登頂できる状況ではなく、全て執念によるものであった。その代わり、頂上からの素晴らしい眺めはほとんど記憶にないということであった。彼にとっては、人生で忘れ得ぬヒトコマであり、小生にとっても3回目の6000m峰での息子の如きパートナーであった。

<15日間の登山活動を終えて>

登頂後、カーレBCに帰り休息を取った後、同ルートでルクラに15日目に帰り、登山活動を終わった。なおタングナにては、マオイストによる集金で一人当たり5000ルピー（約8000円）の支払いをさせられた。銃も持たず2人で集金をし、領収書をくれた。

また関君の高度順化状況は極めて良好で2日目の4000m越え、および7日目のメララ5150mで、頭痛に悩まされながらも耐え忍び、極めて好調にアタックに備えられた。

今回の最大の反省点は、関君の上下ヤッケが意外に寒気に弱く、小生としても上下5万円の積雪期用を買わせるべきであった。当初は下着にてカバーする予定であったが、本人に寒気に対しての自覚が弱かった。

また佐々木は、喉の風邪に悩まされ、高所の登る程咳き込み、呼吸に支障をきたしたが頭痛はしなかった。しかし、5000M以上での登りにはかなりこたえた。



メラ．ピーク（6473M） の頂を目指して

関 智弘

出発は午前3時だった。満点の星空の下、登山準備をハイキャンプ5600mにて行う。前日までの高度順化もほぼ完璧にでき、僕の体調はこの旅で最高に達していた。軽く登れそうだというのが、この時点での素直な気持ちだった。その油断は、僕の服装の甘さに出た。歩き出したら温まるだろうという考えでスタートは切られたのだ。

マイナス15度の世界は想像を絶するものだった。冷気が体にしみ込んでいく。鼻水が凍る。足先や手の指先が痛む。あまりの寒さで息がうまくできない。こうして僕の体力は瞬く間に奪われてしまった。2時間ぐらい経って、空が少しずつ白み出す頃、自分の体力が尽きたことを悟った。

「もう無理です」と言おうとした。でも言えなかった。夜明けの光に照らされながら、ネパールへの出発の直前に亡くなった故人のことを思い出した。僕にアウトドアの楽しさを教えてくれた人だった。彼の遺品を遺族に頼まれて持ってきている。覚悟を決めた。とにかく頂上までは行こう。あとは、ままだ。

ここから先は、気力だけで登ったような気がする。気がするとしたのは、あまり覚えていないからだ。立ち止まるだけで全身が震える状態で、半分忘我していた。頂上からの景色もほとんど覚えていない。800mを約6時間かけて登ったようだった。

でも、ハイキャンプに戻ってこれた時、よかったなあとしみじみ思った。生きて帰ってこれてうれしかったし、目的を達せられてうれしかった。ただ、下りは荷物をシェルパに持ってもらったので、半分しか自力で登ったと言えない。次こそは、という思いになったのも事実だ。

ご支援、ご声援ありがとうございました。

エヴェレスト街道 思いがけない道中記

関 智弘

＜カラパタールへの道＞

メラピーク15日間の登山を終えてナムチェにいたり、エベレストビューホテルからの景観を大いに楽しみ、観光気分です18日ナムチェを出立したが思いがけない事態が発生した。関君が風邪にかかったのである。この為、同日タンボチェで発熱し、19日午前ダウンしてストップ。明るる日20日も沈殿。

21日ようやく熱が下がったようであるが、ほとんど3日間絶食が続き、本人は全く進む気力を失う。喉が腫れて食べ物がおらず、口の中が腫れて痛いとの事。なだめてデインボチェに半日行動し、22日ロブチェに行けるところまでと出発。

ここから山の景色が次々と展開する中、黙々と歩き4850mのロブチェにつく。途中、タボチェ、ツラチェ、プモリが強烈に迫ってくる。

＜ロブチェよりカラパタール アタック＞

23日5時起床。快晴マイナス5度ぐらいの中、6時出発し、ゴラクシェー5050mに8時半到達。

ここから目の前のカラパタールの丘に向かって9時スタートし、またまた行ける所までとジリジリ登る。ほとんど彼の胃の中はカラで、多くのツアー客に交じり、必死の登行が続く。3時間かけて約500m登りカラパタール5500mにつく。最後の登りは痛々しく、根性を見せ付けられた。メラピークでの根性と同一性のもので、どこから力が出てくるのか不思議であった。

プモリの正面に位置する頂上からは、圧倒的なヌプツエー、エベレスト上部と下部のアイスフォールがたちはだかり、遠くはアマダブラム等々があり、絶景としかいえないようがなかった。

下りはゴラクシェーまで1時間45分で、大休憩して午後2時ロブジェに向かい、4時到着。実に10時間にわたる病身のなかの粘りであり、この粘りは彼の今後に大きく役立つであろうと考えさせられた1日であった。

＜終わりに＞

その後、彼の風邪は、次第に良くなるも口の中の荒れは続き、食欲は半減したが食べられるようになり26日ナムチェバザールに帰着しました。この日は天気がすぐれずタンボチェからの朝の豪快な景色を望む事ができませんでした。計画としてゴーキョに行く予定でしたが割愛し、早めにルクラにもどった。

またナムチェからターメに足を伸ばし、42年前にランタン、リルンでトップクライマーであった

シェルパのミンマツエリンに会いにゆき、運良く会え、73歳でシャンとした彼の姿勢をみせられ感動を覚えた。

＜経費概略 2人分＞ \$=¥110

関空→カトマンズ ¥250000 カトマンズ→ルクラ \$400

登山許可 \$350

トレッキング代金 \$62×31日×2人=\$3844

シェルパ、コック、ボイナス \$200 入国ビザ \$60

カトマンズ宿泊 \$100 マイト対策 \$150

食料 ¥14000 薬品 ¥15000 保険 ¥27000

合計 ¥867440(一人当たり¥433720)



初めての海外旅行はヒマラヤ登山

関 智弘 (法学部4回生)

<行動日程概略>

9月27日 大阪→バンコク

28日 バンコク→カトマンズ

29日 カトマンズ滞在

30日 カトマンズ→ルクラ (2800m) →
チュタンガ (3100m)

クライミングシェルパ、コック、キッチンボー
イ、ポーター 合計11名 でビックリ。

昼過ぎキャラバンに出発。

10月1日 チュタンガ→チャトゥララ・パス
→チュムラング (4200m)

チュムラングにて初めて軽い高山病にかかっ
た。しかし、食事は素晴らしいの一言でこれか
らが楽しみ。

2日 チュムラング→コーテ (3600m)

朝になっても頭痛と体のだるさは残ったが、
今日の行程はだらだと下るものだったので、
昼には楽になった。あと、僕の誕生日だったの
でコックがケーキを作って祝ってくれた。素直
にうれしかった。

3日 コーテ→タングナ (4150m)

朝、マオイストに150ドル (1万ルピー)
を徴収された。意外と紳士的でお釣りもくれた。

4日 タングナ滞在

高度順化のために裏山4750mまでハイキ
ング。

5日 タングナ→ディグカルカ→カーレ
(4800m)

ディグカルカなる川の流れる平原が美しかっ
た。

6日 カーレ→メララ (5100m)

ベースキャンプのメララに入る。途中、結構
やばい雪渓がありシェルパがフィクスしてくれ
た。あと、一気に高度を上げたので頭が痛んだ。

7日 メララ滞在

高度順化のためハイキャンプまで行って戻っ
てくる。帰りにみぞれに合い、寒かった。

8日 メララ→ハイキャンプ (5800m)

夕方にエベレストやマカルー、カンチェジュ
ンガ、メラピークなど多くの山を見渡せて感動。
特にピーク41の美しさは格別であった。

9日 ハイキャンプ→メラピーク (6473m)

→ハイキャンプ→カーレ

早朝3時に出発。寒気に完全にやられ、ふら
ふらになりながらピークに着く。おかげで頂上
のことはあまり覚えていない。その後、下山を
果たすが、気分が悪くて昼飯も食えず。
カーレに着いて、無事下りてこられたことに安
堵した。

10日 カーレ滞在

休日ということで、シュラフを干したりし
てくつろぐ。

11日 カーレ→タングナ→コーテ

タングナに下りる途中の湖にシェルパが連れ
て行ってくれた。エメラルドグリーンの美しい
水面に見とれた。道中で日大山岳部OBの方3
名に出会った。

12日 コーテ→チュムラング

行きが下りだったということは、帰りは上り。
延々と続く上りに嫌気がした。

13日 チュムラング→チャトゥララ・パス→

チュタンガ

帰り道は退屈。

14日 チュタンガ→ルクラ (2800m)

やはりルクラに戻ってくると、ほっとした。久々の小屋泊まり。登山がやっと終わった。あすからトレッキングとなる。

15日 ルクラ→パクディン (2610m)

これまでとは違い、ヒマラヤ街道はトレッカーとヤクが多くいて大変賑わっていた。

16日 パクディン→ジョルサレ→

ナムチェバザール (3440m)

ナムチェへの上り坂は結構きつかったが、佐々木さんとがんがん上ってやった。ただ、砂煙がすごく歩きにくかった。

17日 ナムチェバザール滞在

エベレストビューホテルへハイキング。ホテルのテラスからの眺めはなかなか。ただ、砂煙を吸い過ぎたせいか、夕方から悪寒がしたので薬を飲んで寝る。

18日 ナムチェバザール→タンボチェ→

デンボチェ (3800m)

朝起きて、風邪気味のままであったがとりあえず歩いてみることにした。しかし、昼飯のころには事態は悪化の一途を辿り、これはちょっとやばいぞと思った。タンボチェへの長い上りはまさに地獄と呼べるものであった。肺が痛み、冷や汗を背中にびっしょりかいた。デンボチェで医者と名乗るおばさんの診療を受けて、のど飴をもらった。この日の昼から飯をほとんど食べなくなった。

19日 デンボチェ→ソマリ (3900m)

のど飴は全然効かなかった。まあ、最初から期待してはいなかったが、朝から歩きたくないなあとは思った。でも、佐々木さんが歩けと言うので、しぶしぶ歩いた。案の定、すぐにしんどくなって、それでも我慢して、そのうち限界が来て意を決して佐々木さんに僕はここで泊まると言ってみたが、昼飯の場所までは歩けと言われ、へろへろの体でそこまで歩き、バタンキュー。

20日 ソマリ滞在 (療養沈殿)

丸一日寝て過ごす。相変わらず飯はほとんど食べず。

21日 ソマリ→ディンボチェ (4080m)

心底歩きたくなかったが、嫌よ嫌よも好きの内ということなのかどうかは知らないが、佐々木さんに歩いてみようやと言われ、やけくそで歩く。

22日 ディンボチェ→ドウルハ→ロブチェ (4900m)

ここいらで佐々木さんの顔を見ていて、歩きたい歩きたくないではなく、僕には歩くという選択肢しかないのだとようやく悟った。こうなると、飯もろくに食べていない僕は短期決戦だなと腹を括った。でも、今日も苦しかった。

23日 ロブチェ⇄ゴラクシャール (5150m) ⇄カラパタール (5550m)

カラパタールへの上りは、足が全然前に出なかった。飯も食わず、腹も下しながらここまで来たが、自分の体の中にもはや何も燃やすものが残っていないのだと自覚。からっぽだった。虚無感に襲われた。でも歩いた。意志の力は偉大なり。

24日 ロブチェ→ペリチェ

久々の小屋泊まり。あとは下るだけだと思う
と気持ちも幾分楽になり、少しずつではあるが、
飯も食えるようになってきた。

25日 ペリチェ→タンボチェ (3870m)
行きは見る余裕のなかったタンボチェの寺院
を見学。霧の中に浮かぶ寺院は興味があつた。

26日 タンボチェ→ナムチェバザール
ナムチェまで下りてくると、帰ってきたなあ
という思いに駆られた。

27日 ナムチェバザール滞在
40年ぐらい前に佐々木さんのランタンでの
ザイルパートナーを組んだミンマツェリンとい
うシェルパに会いにターメという集落までハイ
キングに行った。当初は近いと聞いていたのだ
が、片道3時間ではもはやハイキングではなく、
かなり疲れた。でも、膨大な時を超えて再会を
果たした2人の喜ぶ姿を見ていると、僕まで温
かい気持ちになれた。

28日 ナムチェバザール→ルクラ
ついに帰ってきた。マラソンの有森さんでは
ないが、自分で自分を褒めてやりたいと思った。

29日 ルクラ滞在
朝から正体不明の激しい腹痛に襲われる。最
後の最後までこんな目に合うとは、とさすがに
泣きくなった。

30日 ルクラ→カトマンズ

31日 カトマンズ滞在

1日 カトマンズ滞在

2日 カトマンズ→バンコク

3日 バンコク滞在

4日 バンコク→大阪

<感想>

日本に帰ってきて友人などに「行って何か変
わったか」とよく聞かれるのですが、僕自身は
何も変わってないような気がします。そもそも
何かを得たくて行ったわけでもなかったですし
ね。

でも、色んなことを感じはしました。すごく
当たり前のことですが、自然は厳しいというこ
とを、高山病や寒気で参ったりする中、肌で感
じられました。そんな厳しい自然の中にあつて、
僕はなんと小さき存在なのだろうとも思いまし
た。僕が山に登るのが好きな理由の一つとして、
自然と対峙すると少しだけ自分が謙虚になれる
ということがありますが、それを今回はより一
層強く感じることができました。

あと、意外な発見だったのは、自分が思っ
ていたよりも忍耐強さが残っていたのだという認
識でした。今回の旅において、僕は風邪・絶食・
下痢と苦しいことのフルコースを味わいました
が、それでも歯を食いしばって歩けたのは、ひ
とえに根性であつたと思っています。そういう
わけで、大学生活でたるんでしまったと思っ
ていた自分のことを少し見直したわけです。社会
人になって少々つらいことがあっても耐えられ
るのではないかと期待しています。

帰ってきてからもう1ヶ月が経とうとしてい
ますが、ネパールにいた時のことは昨日のこと
のように鮮明に思い出せます。それだけ僕にと
って濃い1ヵ月であつたからでしょう。ネパー
ルの雄大な山々を時に思い出しながら、これか
らの山登り・人生に活かしていけたらと思っ
ています。

最後になりましたが、皆様の温かい支援まこ
とにありがとうございました。

小林 治俊君 を追悼して

奥田 寛

六甲はヒマラヤの道へ通じている、とは大阪市立大学山岳部に入部 1 年時に、彼が漏らした言葉である。その場の状況はすっかり忘れてしまったが、氷雪の山や海外の高峰に、ただ好奇心を示すだけの同期の私には、六甲とヒマラヤとがしっかりと繋がる思考回路に驚かされたことが、記憶として鮮明に残っている。

彼が工学部の学生でありながら、学業と登山の両立をきちんと計るばかりか、2 年生の 3 月山行からチーフリーダーとしてその責を全うするには、まさに当然と言える。

彼との山行で最も印象深いのは、私が就職直前の 3 月に出かけた北ア・北鎌尾根である。故後藤君を入れての 3 人パーティだったが、湯俣川沿いの腰まで潜るラッセル・独標付近の表層雪崩との遭遇・月明かりの下での槍の穂先から槍の肩への下降など盛り沢山な出来事だった。

彼は入部以来、岩登りを好んでいたが、思うように北アルプス等の岩壁に取り付けられない、と悶々としていた。それもあって、関西学生連盟 O B 会の結成と運営に深く関わったと思われる。その集大成がカラコルム・ケント II 峰登山隊の隊長として出かけたことであつた。幸い初登頂という成果を出せて、安堵と満足を得られたと思う。

ヒマラヤと言えば、こんなエピソードがあつた。ネパールが登山禁止をしていた時期に、彼はトレッキングを行っている。これは、当会の大先輩がトレッキングをするに当たり、現役学生を 1 名同行させたい、との申し出によるものであつた。

実は、この話が異なるルートで彼以外に故後藤君と私にももたらされていた。期せずして指定の会合に 3 名が顔を揃える事態になった訳である。誰を選ぶかに困った先輩方の解決策はジャンケンで、結局彼に決まった次第。今では格好の笑い話である。

ところで、先頃の阪神・淡路大震災は、現実の六甲を直撃すると共に、彼の内なる六甲にも衝撃を与えたと考えている。これを契機に、学問研究に一層の研鑽を行って、大いなる業績をあげるとともに更なる前進を図る途上にあつたと思う。病魔がそれを阻んだのは誠に残念である。今は冥福を祈るのみである。

「大阪市大教授（山岳部部長） 小林治俊氏はかねてより入院加療中でありましたが、薬石効なく、平成 17 年 9 月 5 日（月）午前 10 時 10 分にご逝去されました。通夜は 9 月 7 日、告別式は 9 月 8 日 に行われました。ここに謹んでお知らせし、お悔やみ申し上げます。」

中央アルプス

太田切川本谷遡行記録

記録： 伴 明 写真： 山田 裕敏

メンバー：小椋 剛、近藤 由佳（現役）、山田、伴

日時：2005年9月17-19日

9/17 駒ヶ根山荘「雪線」→檜尾橋→本谷取水口→トラロープの滝→梯子ダル沢出合→二俣（東熊沢出合）→巨岩より手前のテント場

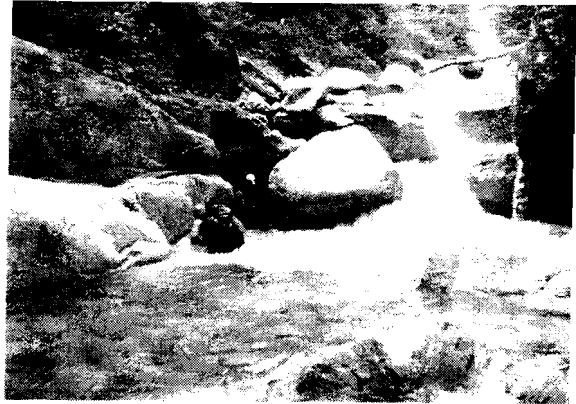
9/18 テント場→上の二俣→沖屏風岩沢（間違い）→上の二俣→本谷詰め→東川岳肩の縦走路→殿越山荘

9/19 山荘→空木岳→池山尾根→雪線

9/17 晴れ

太田切川本谷は、空木岳池山尾根／東川岳／檜尾根に囲まれ、流程は長いが下部ゴルジュが面白そうだしランクは2級でやさしそう。現役のリーダー小椋君と新入部員の近藤さんと中高年2人で朝7時雪線を出発した。檜尾橋でタクシーを降り40分巡回路を歩いて取水口に着く。取水口のフェンスを乗り越えさせてもらい、本谷に降りたって8時半スタートした。すぐに魚止めの滝が現れる。流れの左側は6mほどの大岩二つの間にトラロープが垂れ下がり、真ん中は岩が被っていて乗越せず、右側壁にはちぎれたロープがさがっている。右左岸ともに高捲き不可能ゆえ、左の大岩の間をトラロープ頼りによじ登る他ない。3mほど岩の間を宙釣りになるので人の肩に乗ってトライするが1度目駄目、2度目も駄目。諦めてここから引き返すのはしゃくなので、3度目の正直とてトラロープにシュリングで即席アブミを作って引っ掛け、山田が強引に登り切った。次に来る時にはアブミ2セット必要だ。沢登り1年生の近藤さんがみごとにクリアしてくれてとても驚く。4人のザックを引っ張り上げた頃、登研の二人パーティが現れたが、同じ苦労も大変と思い我々のザイルを使って上がってもらった。ここだけで1時間費やす。

しばらくして、左側壁をへつるのに胸まで流れに浸かる箇所あり、ザイルを出し半分泳ぎながら通過。



ここで沢慣れた三人組がザイルも使わず我々を追い越していったが、その三人組に追いついて見ると、わざわざ真ん中の流れを泳いで沢中の大岩を乗越そうとしている。



我々は左岸7m高さの草付き岩場をトラバースして簡単に大岩の上に出たが、彼らはミドルの新人らしき男を引っ張り上げるのに苦労していた。11時20分ゴルジュが左に曲がる正面に梯子ダル沢が見えた。高さ60m幅30mはありそうな迫力のある滝で滝右側のルンゼ状を登ったと思われるが登攀記録がある。



左岸から頭上に覆い被さるような岸壁に圧倒されつつゴルジュのなかを進むと、左側の岸壁の間を20mほどトラバースする個所に出た。高さ7・8mの滝の落ち口へ、へつり降りるのだが、先行した三人組の一人がスリップして滝壺へドボンと派手な水しぶきをあげた。ザイルを降ろして引っ張り上げてあげる。山田がトップで途中1ヶ所のピレーピンを使ってトラバースし、近藤さんは15kgほどのザックを背負ったままトラバースして最後の滝上への降り口でスタンスに苦労、小椋君は20kgはありそうなザックをかついだまま安定したバランスで渡る。伴は10kgしかないザックなのにびびりつつ滝口へ降りた。



ほどなくゴルジュは終わってゴーロ状の広い沢が続く。



左手に大地獄沢を見送って、右手から東熊沢が入ってくる二俣を2時頃通過。さらに1時間進み、右岸も左岸もブッシュ帯で平らな場所がなく、沢の流れのそばを整地して3時に

テントを張った。乾いた流木の焚き火が空を焦がし、わずかなウイスキーが清冽な沢水とともに喉にしみ入った。

9/18 晴れたり曇ったり

水の尽きる上の二俣着8時30分。この二俣を殿越沢と本谷との合流点と考え、右俣つまり本谷のガラ沢を登り左の支尾根に取付いて途中から殿越の科尔に出ようとした。本谷だとばかり思って、空滝でザイル2度使いガラガラ急な枯れ沢を登っていったが、左の尾根に取付くのが難しい。



やっと傾斜の緩い草付きを経て尾根に取付いて見ると、さらに左の沢をへだててもう1本尾根があった。明らかに沢1本右へ間違った。殿越沢と本谷との二俣と思った個所がじつは本谷と沖屏風岩沢との二俣で、本谷を登っているつもりが沖屏風岩沢を登ってしまった。12時、間違った尾根から二股まで降りる。20mの懸垂下降を2度、初めての近藤さんはとくにびびることなく無難にこなした。3時、5時間ロスしたがあらためて二俣の左俣である本谷を登る。切り餅状チョックストーン所で左の支尾根に取付こうとするが、草付きがヤバいので止めて、そのまま本谷を最後までつめることにした。ルンゼ状の沢はせばまり、浮き石だらけの急傾斜となり、岩溝と草付きと最後20分間の這松/石楠花漕ぎに疲れ果てて、やっと東川岳の肩の縦走路に飛び出した。殿越山荘着夕6時。



殿越山荘にて

夜中に満月と星が空木岳の肩を浩々と照らしていた。



空木岳 山頂にて

9 / 19 晴れ

朝 5 時半殿越山荘出発、空木岳 7 時、池山尾根を経て鷹打ち場 11 時着にて終了した。山荘から帰阪直前の大島君が X-Trail で此处まで迎えに来てくれた



～現役部員だより～

文責：木野

2005年度は新たに二名の新人を迎え入れました。ただ、入部者の一人は看護学科へ学士入学した近藤さん、もう一人は来年より市大大学院へ進学予定の藤井君というわけで、和田君（2004年度入部）以降に引き継ぐ部員（つまり高校卒業したての新入学生）がおらず、依然厳しい状況は続いています。

しかし学部学科年齢はどうあれ、一人でも多くの学生が山岳部に興味を持ってくれるというのは喜ばしい事で、今後も性別年齢に関係なく、より多くの新人を受け入れる事ができればと思っています。

今回は2005年度入部の新人自己紹介と、「山岳部で得たもの・得たいもの」というテーマで部員それぞれに書いてもらいました。

＜新人紹介＞



藤井陽介（24） 福岡県出身

理学部物理学科4回生

（来年は市大大学院・数理物理研究室進学予定）

のんびりしていると学生生活が終わってしまうので、できるだけ早いうちにクライミングの技術を身につけたい。できれば来年の冬山にはザイルを持って乗り込みたい・・・というのがありますが、まずは結び方の練習から始めようかなと。勿論、部員の皆様と達成感や充実感、感動なんかも共有したいものです。

とりあえずの目標は、毎週どこかの山に登る事。色々な山に登りたいが、何となく厳冬期の北海道・東北の山に魅かれる（遠いから？）。修士論文はさっさと書いてしまって心置きなく山に登りたい。



近藤由佳（23） 大阪府出身

医学部看護学科2回生（学士入学）

マイペースに山と付き合っていきたいです（九州の山に登ってみたい）。あと、純粹に山も人との関わりも楽しみたいです。

まだ山岳部に入って日は浅いですが、山との付き合い方も人それぞれ、ということを実感しています。今後の活動を通して私も自分の山登りを見つけていければと思います。

＜大阪市立大学山岳部で得たもの・得たいもの＞

(部員名は五十音順)



・小椋剛（２００３年度～２００５年度主将）理学部生物学科３回生

山岳部に入ったおかげで、一人だけだったら多分登ることのなかったであろう山、例えば日本アルプス・沢登り・雪山などに普通に行けるようになりました。また、部に入る前はあまり興味のなかった雪の世界などの自然にも興味がわいて、自分の自然観が少し変わった様な気がします。あと、人の先頭に立つということの大変さがよくわかりました。山に行っていれば、これからも間違いなく得る事がたくさんあるので、もっと山に通おうと思います。

・木野英史（２００３年度～２００５年度主務）法Ⅱ部法学科３回生

山岳部に入るまでは、山といえばハイキング程度のものしか頭のイメージがなく、まさか入部早々に残雪期の剣岳に行くとは想像すらできませんでした（当時は山岳部というものをよくわかっていなかったということです）。そして、「何でこんなしんどい思いせなあかんねん...」と、今も昔も山に登るたびに思うのです。それなのに気が付けば、また山に登りたくなっているのです。自分のことながら、どうしてなのか正直いまだにわかりません。なぜ山に登るのかさえははっきりとわからないのに、自分自身が山岳部で得たものといっても、なかなか適切に言葉で言い表す事ができないのですが、無理やり言葉で表すならば、「貴重な経験」と「新たな自分の発見」になるのかもしれませんが。あと、山岳部に入らなければ出会わなかったであろう、「個性的な友」も得がたい存在です。



・澤真平（２００３年度入部）理学部地球学科３回生

僕は高校時代にも山岳をやっていましたが、大学でこの山岳部に入ってからにいい体験ができたと思います。なにより高度な技術と道具が魅力的でした。今まで知らなかった技術を身につけることもできましたし、使った事のない道具も使い方を知ることができました。今年はあまり活動に参加する事ができなかったのですが、来年から、まずは今の技術を最大限活用してみようと思います。

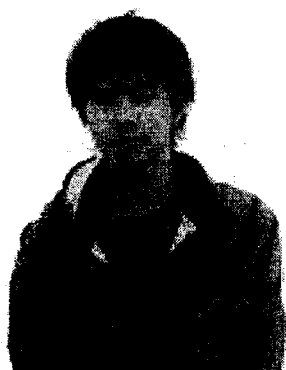
・塩見修平（２００４年度入部）大学院理学研究科・前期博士課程

良くも悪くも、この部は自由です。部員を拘束しません。学部生の時は比較的拘束のきつい部に所属していたこともあり、このような山岳部でいいのかどうか疑問に思っていました。しかし、最近は、こんな山岳部も在りだなと思います。「行きたい時に、行きたい山に行く。」これが山を楽しむ王道だとしたら、まさにこの部は、それを地で行っているような気がします。また、このような自由な形の山岳部こそが、今の時代に合った新しい形の山岳部なのかもしれないという気さえしてきます。こういった山岳部だからこそ、研究に専念しなくてはいけない修士課程の自分であっても、研究と山という普通は両立しがたいことを、曲がりなりにも両立できています。山を続けられていることが僕にとって山岳部で得ることのできたひとつの大きなことです。また、人とのつながりが広がったことも、この山岳部で得られたことのひとつです。学部はよその大学で過ごしたため、この大学での人とのつながりは山岳部に入っていなかったら、今ほどなかったように思います。ザイルワークなどの技術を覚えられたことも、得られたことのひとつです。これからこの山岳部で得たいこととしては、山の技術向上はもとより、自由な山岳部の一部員として、（自由であることはいいいことですが、ともすればかなり危険なので）自分の頭で考え、自分で自分を律し、行動する能力です。また、来年度からは博士課程でますます忙しくなりそうですが、山に行く機会を増やしていきたいと思います。そして、何よりも山に登った達成感、これをもっと得ることができるようにしたいものです。



・関智弘（２００４年度入部）法学部法学科４回生

山岳部で得たことは、経験だと思います。もちろんＯＢの方の現役時代に比べると何もしていないに等しい僕の活動ではありましたが、それでも僕自身にとっては印象深く忘れがたい経験がいくつかあった気がします。特に思い出深いのは、初めての活動となった奥穂登頂と、ネパールに行けたことです。両方ともこれでもかというぐらいに苦しみましたが、ゆえに忘れられぬのでしょう。



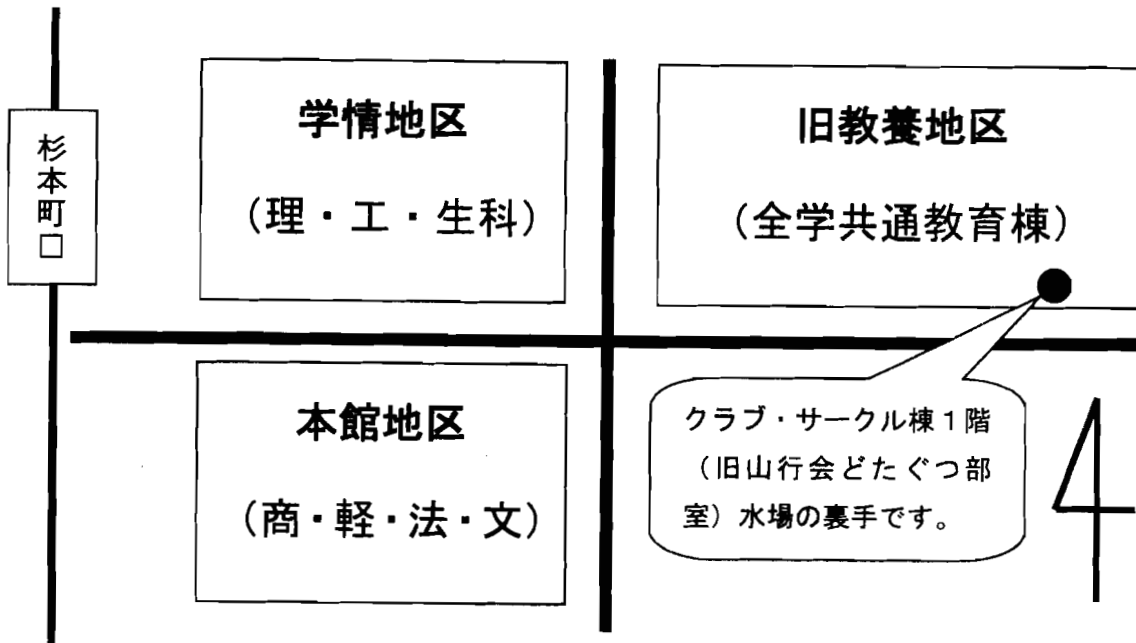
・和田典之（２００４年度入部）経済学部経済学科２回生

難しいテーマですがあえて答えるならば忍耐力や度胸といった精神的な部分でしょうか。元々忍耐力などはある程度自信のあった分野ですが、この二年でまた少し成長したのではないかと思います。特にそのきっかけとなったのはやはり昨年の夏山でしょうか。あれが僕にとって最も長い山行だったので。



＜部室の場所が変わりました＞

現在の山岳部部室は、旧教養地区・第二体育館横のクラブサークル棟にあります。気軽にお立ち寄りください（部員不在時は施錠されていますのでご連絡ください）。



<編集後記>

小林治俊先輩が亡くなられた。どういうわけか、大先輩なのに、現役も若手のOBも小林先生のことを「小林さん（こばやっさん）」と呼んでいた。おそらく小林監督にお世話になったどの会員も、「きびしいが、面倒見がよかった先輩」とご記憶のことでしょう。

幾つかの思い出を・・・

①数年前のある夏の暑い日、若手の集まりがあり、その小林さんが療養中というのも知らず、間抜けな筆者はお声をかけてしまった。居酒屋に入りましたが、もちろん、お酒などは飲まれず、持参されたカロリーメイトを肴にあたたかいお茶を飲まれておられました。

②学生時代、岡会員とネパールへトレッキング登山に出かける際も、「無理だから行くな」ではなく、「付け焼き刃登山隊」とさんざん酷評しながらも、空き校舎を準備のために調達していただき、アイゼンバンドの選定まで、行くためのアドバイスを細かくいただきました。

その小林さんに報告を聞いて頂いた時の笑顔を思い出しました。

③小林先生からちょうどいした結婚式の祝辞。「日常の些事を愛せよ」。

つつしんでご冥福をお祈り申し上げます。(Y)